

まともに聖書に向い合う

丸山 勉

[聖書] ローマの信徒への手紙 5章 15～21節

しかし、恵みの賜物は罪とは比較になりません。一人の罪によって多くの人が死ぬことになったとすれば、なおさら、神の恵みと一人の人イエス・キリストの恵みの賜物とは、多くの人に豊かに注がれるのです。この賜物は、罪を犯した一人によってもたらされたようなものではありません。裁きの場合、一つの罪でも有罪の判決が下されますが、恵みが働くときには、いかに多くの罪があっても、無罪の判決が下されるからです。一人の罪によって、その一人を通して死が支配するようになったとすれば、なおさら、神の恵みと義の賜物とを豊かに受けている人は、一人のイエス・キリストを通して生き、支配するようになるのです。そこで、一人の罪によってすべての人に有罪の判決が下されたように、一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになったのです。一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです。律法が入り込んで来たのは、罪が増し加わるためでありました。しかし、罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれました。こうして、罪が死によって支配していたように、恵みも義によって支配しつつ、わたしたちの主イエス・キリストを通して永遠の命に導くのです。

[序] 「宗教改革記念日」を迎えて

早いもので11月を迎えました。再来週にはこども祝福式と焼きそばパーティーも予定されていますし、もうクリスマスまで一ヵ月半ほどです。そんな中、ちょっと遡ることになります。4日前の10月31日は、プロテスタント教会が生み出されたきっかけとなった「宗教改革記念日」でした。1517年のことですから、502年も経ってしまったことになりますが、今日は、それが“今の”私たちに問うていることは何かを見てゆきたいと思いました。そこには、あのマルティン・ルターが聖書と真剣に向かい合ったことによる、私たちが受け継ぐべき大切な遺産があると思うのです。

[1] 信仰に潜む自己満足と傲慢

「宗教改革」と言う言葉なのですが、それはあまり内実を捉えている言葉では何かも知れません。ルターは、いわゆる<宗教の>改革をしたのでしょうか？「宗教改革」の意味合いは、単に当時のカトリック教会からプロテスタント教会誕生という西洋史の問題ではなく、もっと深みにある<信仰>そのものの再構築の問題でした。英語でそう言うのだそうですが、「Reformation」(改革)なのです。表面的な、見かけ上の「reform」(リフォーム)ではないのです。

私は今日の準備のために、一冊の本をかなり参照しました。徳善義和先生という、ルターの宗教改革研究の第一人者であり、ずっと牧師もしてこられ、ルーテル学院

大学の名誉教授であり、実は私もこの先生の FEBC でのシリーズ番組の収録を担当させて頂いたことがあって、大変多くのことを学ばせて頂いたのですが、この徳善先生が割と最近（3年前）お書きになった、『マルティン・ルター—ことばに生きた改革者—』（岩波新書）という本です。

今日はその本からの引用を少しさせて頂きながら、私たちにとって<信仰とは何か>、聖書はそれをどう語っているのか、そのことをご一緒に見てゆきたいと思います。徳善先生は、その中でこのようなことを書かれていました。

「ルターが入った修道院の生活は厳しかった。中世末の教会や修道院に関しては、しばしばその墮落が指摘されるが、ルターのいた修道院は最良の部類に入るものであった。したがって、ルターが宗教改革を推し進めた背景として、修道院の墮落を挙げるのは適切とは言えない。むしろ、当時の修道院の最善の部類に潜む根深い問題、すなわち、自己満足と傲慢に気付いたために、ルターは宗教改革に取り組むことになったのである」。

歴史というものは、必ず今の時代の教訓となるものを持っています。ルターが宗教改革を始めるきっかけも、決して派手なことではない、ルター自身の心の気付きから始まったということは大切なことだと思います。ルターは<当時の修道院の最善の部類に潜む根深い問題、自己満足と傲慢に気付いた>とありました。そうです、「信仰」というのは、いつでも自己満足、自己充足、また、傲慢に陥りやすいのです。

[2] 全生涯の「立ち返し」を

ここで、あの 10 月 31 日に、ヴッテンベルグ城の城塞の教会の扉にルターが貼り付けたといわれる有名な「95 箇条の提題」の第一条の言葉を見てみたいと思います。それは、「私たちの主であり師であるイエス・キリストが、「あなたがたは悔い改めなさい」と言われた時、イエスは信じる者の全生涯が悔い改めであることをお望みになったのである」という言葉です。

神様と人間との関係で一番大切なこと、それは、絶えず神様のもとに立ち返っていくということです。その立ち返りのことを聖書は「悔い改め」と言います。人間が「私は、俺はもう大丈夫だ」と思ってしてしまうことが、一番の人間の危機だと聖書は言うのですね。それは例えて言えば、自分が迷子になっていることに気付かずに、危険な崖に向かって歩みを進めているようなものです。もともと自分がいたところに戻らねばなりません。ルターは、その立ち返しこそ、私たちの全生涯の事柄なのだと言うのです。大切なのは、これはキリスト者でない者に対して言っているのではなく（その方たちも含まれていますが）既に信仰を持ち、幼い時から洗礼を受け、しかしその信仰が観念化している、自らの信仰の上にあぐらをかいている者たちに向かってルタ

一は語っているのです。当時のヨーロッパは、一大キリスト教文化の世界だったのですから、すべての人に向かって、と言って良いと思います。

ルターがこの信仰の内的な改革（Reformation）のために立ち上がった背景には「贖宥状」（「免罪符」）の問題がありました。免罪符というのはお聞きになったことがあると思います。これは実は、**罪の赦しに対しては、効力がないのです**。根本的な罪の赦しにはなり得ません。ではどういうものであり、皆がそれを喜んで買い求めたかという、これを買うと、当時のカトリック教会が強調していた「煉獄」において、**犯した罪の“罰”が免じられる、償われるとされていたのです**。それは聖書には書いていないことなのです。しかし、当時聖書というものは、ごく一部の修道士や学者が目にし、しかもギリシア語、ないしラテン語で読まねばならないものでした。一般大衆は、修道士たちの**説教**を聞く以外にありませんでした。説教とは、民衆の魂を神様に導いていくものです。しかし、それが当時の教会のありかたの中で、**神ならざるものに誤り導く道具になってしまい、安易なかたちで罪の赦しを頂ける様に錯覚**させていたのです。それにルターは激しい憤りを覚えました。聖書はそんなことは語っていないということにルターは気付いたからです。

この「贖宥状」（「免罪符」）にあるには何でしょうか？ 私は思ったのですが、今日的に言えば、罪の審きの免除（「罪の赦し」と言ってもよいでしょう）の為の＜自動販売機＞のようなものではないでしょうか。こんなにお手軽で便利なものはありません。皮肉なものです。ヨーロッパでキリスト教は公認化され、大きくなりました。しかし、キリスト教の文化が浸透すればするほど、**その中の「いのち」が失われていくことになった現実があったのです**。その「いのち」とは、**イエス・キリスト**です。この方は、お手軽に買ったり売ったり出来るようなものではないのです！

[3] 自分が恵みの神を獲得するのではなく

ルターの**宗教改革の原点は、自分の内的な格闘**にありました。自らの内側をとことん見つめ、まともに聖書と向き合う中で、本当の意味でイエス・キリストの福音と出会ったのです。

ルターは極めて真面目に修道生活をし、聖書と真剣に向い合う中で、大きな疑問にぶつかったのです。それは、「**神の義**」に対するものでした。**詩編 31 編 2 節**にある「**あなたの義によって私を解放してください**」（ラテン語訳より）との言葉に行き詰ってしまいました。このことについて、先ほどの本の中でこのように記されています。

「この言葉からは神の「義」がわれわれ人間に解放、すなわち救いをもたらすものとして期待されていることが読み取られる。神の「義」と人間の「救い」とが、

なぜ一つに結び付くのか。神の「義」を、「怒り」「裁き」「罰」との脈絡で捉えてきたルターにとって、この結びつきは矛盾であり、どうしても理解出来なかった。」

—ルターは、神様は義なる方であり、正しい人間は受け入れるけれども、そうでない人間は斥け、罰する方だと先輩たちからも教えられ、「神の義」という言葉に恐怖さえ感じ、それを憎んでさえいたと言います。ですから何とかして神様に受け入れられる信仰者になりたい。しかし一生懸命におつとめもしながら、まだこんな自分では不十分だ、ダメだ、ダメだと思い、苦闘していました。彼の「救い」の立ち位置はいつも「いかにしたら恵みの神を得られるのか」だったのです。

しかしある時、新約聖書の「ローマ書」を読む中で彼の中に**逆転**が起こりました。このように記されています。

「ローマの信徒への手紙 1 章 17 節でパウロが「神の義は福音の中に啓示されて、信仰から信仰に至る」と語ったように、神の「義」はイエス・キリストの福音として示される。その福音こそが、人間を解放し、救う。ルターは、神の「義」と「救い」という互いの矛盾するように見えたものが、**実は「キリスト」を介して一つに結び付いていると気付いたのである**」。

徳善先生はこの本の中で更に「神の義」ということの文法的意味について、このように書いていました。—「たとえば「お父さんの贈り物」という言葉で説明しよう。この場合、「贈る」という行為をする主体はお父さんである。お父さんがひとたび贈るといふ行為をすると、その行為によって贈られた品物はお父さんの手を離れ、贈られた人に渡り、その人の所有物になる。ここでの「の」は、行為する主体を指すと同時に、行為の後にはそれがその相手に及ぶという意味合いを持っている。この用法はもともとヘブライ語聖書ではよく使われていたものである。ルターはそこに気がついた。つまり神は、「義(ただしさ)」を、イエス・キリストという形で、罪深き人間への「贈り物」として与える。その結果、「義」は、それを贈られた人間の所有するものとなり、人間は救われる。だからこそ、聖書は神の「義」を「解放」や「救い」と結びつけ、「福音」と結び付けて語っているのである」。

ルターは今や、この神の「義」は、義ではないわれわれ人間、正しくなり得ないわれわれに与えられて、われわれを造り変える力を持つ神の「義」であるとも語ります。これまでルターは「いかにして恵みの神を得るか」と考えていたのが、180度転回し、神の贈り物としての「義」を頂くところに救いがあるのだと変えられたのです。これは「福音の再発見」と言われます。この福音がないと、私たち、救われないのです！この神様の〈贈り物〉を“受け入れなさい”、それが「信仰」です。「信仰のみ」とはそういうことだと思えます。

[結] ただ神様の恵みの故に

今朝開いたローマの信徒への手紙5章の後半は、まるでルターの内的格闘とそこからの救いを語っているかのような聖句だと思います。

「律法が入り込んで来たのは、罪が増し加わるためでありました。」とあります。ルターも律法に従い、神様に近づこうとすればするほど、自らの罪深さと自分の裸の姿が見えて絶望するばかりであったと言います。私たちもそうだと思います。

私たちが通常持っているものさしは、**相対的なものさし**です。周りの者、他者との比較ですね。しかし、それは神様の前には何に役にも立たないことを知らされます。生まれた時がそうであるように、私たちは死ぬ時も何も持ちません。全て手放します。財も持っていきません。肩書きも、勲章も、実績も神様の前には意味をなさないのではないでしょうか？ しかし、それは同時に、**救い**でもあります。人間が神様に「義」、良しとされるのは、私の所有物によるのでもないし、肩書きによるのでもないし、健康であるかないか、男性であるか女性であるか、障害をもっているかそうでないか、そのようなことが条件であるのではなく、そのようなことを全く超えて、ただ「**神様の恵みによって**」義とされるのです。神様に迎えて頂けるのです！**無償の恵み、ただの恵み**です。

なぜ、神様の恵みは無償なのでしょう？——キリストの**十字架による罪の赦し**に値段など付けられないからです。愛に値段をつけたら、愛は愛でなくなります。イエス様の十字架は、神様の、人間を極限まで愛しているというその確かさの現れです。主イエスは、私たちに代わって罪人の裁きを受けて下さり、その故に、私たちに**義の衣＝救いの衣を着せて下さる**のです。私たちがすべきことはこの神様の「**贈り物**」に心を開くことです。

神様はまことに不思議なものさしをもっておられるのです。

「しかし、**罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれました**。こうして、**罪が死によって支配していたように、恵みも義によって支配しつつ、わたしたちの主イエス・キリストを通して永遠の命に導く**のです。」(ローマ5:20~21)

今私たちは、自分で聖書を開き、そこで神様のみ旨、恵みの言葉を日々新しく聴くことが出来るようにされています。これが、ルターが改革してくれた最も大きなことかなと思います。信仰とは、日々御言葉に聴き、神様に愛されている者として、具体的な生活を**生きる**ことです。出会っている人を**愛**することです。許しがたい人を**許す**ことです。簡単なことではないと思います。ルターのように格闘するでしょう。信仰者という者は、「神様を知っている」と、**傲慢**になり易いのです。そのことを常に吟味しなければなりません。けれども、「**罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれる**」のです。まことの神の子イエス様が歩まれた**その御足の跡**を見て、**従ってゆけばいい**のではないのでしょうか。ゴールは約束されているのですから！

お祈りいたします。